

初任者としての一年間

苫小牧市立苫小牧東小学校 教諭 鬼頭早春

中学生の時から夢だった、「教師」という職業。夢の大学を卒業したはいいいものの、一発で教員採用試験に合格することができなかった。社会人一年目は、ある町で、教育委員会から派遣されるTT教員として、色々な学校と関わってきた。そして、2、3年目は、学校に所属しての期限付き教員として働いてきた。働きながら、教員になるという夢を追い、師範塾で勉強し、「今年こそは」という気持ちで、必死に毎日を過ごしてきた。

そして、昨年度、念願かなって教員になることができ、初任者としての一年間が始まったのである。一年目を振り返ると、正規の「教員」としての自覚が足りなかったように思う。そう考える理由は、2点挙げられる。

まず一つ目は、期限付きでの「経験」である。大学を卒業してからの3年間は、正規教員ではないが、学校との関わりの中で、多くの方から色々なことを学んできた。特に、授業のこと、子どもとの関わり方、保護者との関わり方等は、社会人一年目の時の自分よりも、確実に経験が実になってきたと思う。しかし、それは、あくまで長い教師生活の中での、ほんの一部の経験であり、まだまだ経験できていないことがたくさんある。それを、変な自信として持っていたように感じる。汚い言い方をすれば、「なめていた」と思う。そんな自分だったおかげで、昨年度の1学期は特に、学級がうまくまとめることができない場面が多々あった。自分なりに、一生懸命やっていたつもりでも、子どもにしっかりと指示が通らない時が何度もあった。また、勤務校の校長先生には、『期限付き』と『正規教員』とでは、責任の重みが違うんだよ。」と言われてはいたが、正直、その実感が湧かなかった。

二つ目は、「恵まれた環境」である。私が勤務している学校は、ベテランの先生が多い。また、加配のTT教員がいることで、一緒に授業に入ってくださり、子どもたちの支援だけでなく、私へのアドバイスも熱心にしてくださる。このことに関しては、この一年、本当に勉強になることが多く、周りの支援のおかげで自分自身の成長に繋がったと考える。「初任者」ということで、先生たちにはたくさんの配慮をしていただけなのは、とても幸福なことである。しかしながら、今考えると、それが当たり前のような生活になり、周りに甘えていたように思う。

以上が、私の初任者としての一年である。この一年をマイナスに捉えたような書き方をしてしまったが、逆に、この一年があったおかげで、今現在は、とても充実した生活を送れている。初任者としての一年でできなかった、「自分のカラー」を出すこと。受動的ではなく、意欲的に、積極的に仕事に取り組むこと。この二点を常に念頭に置き、生活をしているところである。まだまだ自分自身が未熟なため、周りの先生方の手助けをいただきながらの生活は変わってないが、手助けしていただく点は、去年の自分とは少し違うように感じる。

今後は、できる仕事をさらに増やして、子どもたちのために、また、自分の成長のために毎日を楽しく、大切に過ごしていきたいと強く思う。